

# リフォームで 暮らしをもっと楽しむ

生活スタイルの変化や不便さを解決したいといった理由から、  
リフォームを考えている人も多いことでしょう。  
住まいの満足度を高めるには、自分らしさを出すことも大切です。  
この特集では、家族構成やそれぞれの生活スタイルに合わせた実例を通して、  
リフォームのポイントなどを紹介します。ぜひこの機会に、快適な暮らしを手に入れましょう

取材・文◎アドライブ 撮影◎栗原宏光(P129~P131)、本社写真部(人物)



## リフォーム成功のための5カ条

- 1 事例をチェックして、信頼できるパートナーを選ぶ
- 2 家族全員でリフォームについて話し合い、意見をまとめる
- 3 数ある要望に優先順位をつける
- 4 専門家に要望をしっかりと伝え、じっくり話し合う
- 5 さらなる高齢化に対応できるよう、空間を細かく仕切らない



### 加部千賀子

一級建築士  
共立女子大学 建築・デザイン学科 非常勤講師  
株式会社ビラ・プランニング 主宰  
かべ ちかこ  
東京電機大学工学部建築学科卒業。新築・リフォーム問わず、生活者の視点に立ったきめ細かな設計と四季を感じつつ家族や人が楽しく集まる「元気の出る住まい」づくりに定評がある。共著として『家づくりのバイブル』（三省堂）、『家づくり「気分一新」のリフォーム』（講談社）、『定年後が楽しくなるリフォーム』（亜紀書房）などがある。<http://www.c-kabe.com/>



### ケース2

(上)明るいダイニングにアイランド型のキッチン。夫や子供、来客までもがキッチンに立つ「みんなのキッチン」となり、家族がいつも集まる空間になりました



### ケース3

(右)寝室からトイレ・玄関へ導く手すり付きのカウンター。手すりが目ざわりにならないため、同居の家族も気になりません。カウンターは、家族の気配を感じつつ空間を仕切る役割も果たします

### ケース1

(右)明るく開放的な空間に、和のテイストがバランスよく調和。工事の途中で設けることになった右奥の書斎スペースはご主人のお気に入り。 (下)玄関脇に設けた家事納戸。土足で入れますから、重いものも配達の人にここまで運んでもらえずし、根菜類のストックスペースなどとしても活用できます



## リフォームの秘訣は 専門家とのコラボレーション

年月とともに気になり始める、住み心地。まず頭に浮かぶのがリフォームです。新築住宅のほか、戸建て住宅やマンションのリフォームも数多く手がける一級建築士の加部千賀子さんは、「浴室やキッチンが使いづらくなった、2世帯同居を考え始めた、収納スペースに不足を感じるなど、リフォームの動機はさまざま」といいます。

とはいえリフォームしたいと考えても、どんな住まいが望ましいのか、そのイメージは漠然としたものでしょう。要望を形あるものにするためには、専門家とのよりよいコラボレーションが欠かせません。

では、信頼できる専門家はどのように選べばよいのでしょうか。加部さんは、「まずは事例を見ることです。ホームページで紹介しているケースも多いので、検索してはいかがでしょう」と教えてくれました。「住宅をたくさん手がけているか、実際のテイストが自分に合っているか確認できたら、ぜひ電話して会ってみてください。話してみると問題点を共有してもらえるか、自分の願いをかなえてくれるかどうかかかると思いますが、面談に相談料がかかる場合も

ありますが、相性が悪かったら気兼ねなく断ることができると思えば、割り切れるのでは。

## 一部のリフォームでも 暮らし全体を考えて

リフォームの第一歩は、住まい手の要望を伝えることから始まりです。「調理しやすいキッチン、スッキリとしたリビングなど、漠然としたイメージでも構いません。要望は、ぜひやりたいこと、できればやりたいこと……と優先順位をつけていただくといいですね。また、一部のリフォームであっても、将来の家族像やライフスタイルなど暮らし全体から問題の部分を見ることが重要です」と加部さん。最初に、全体のイメージを決めておかないと、ちぐはぐで不満の残る結果になりかねません。リフォーム後も使い続けたい家具などについても伝ええます。できるだけ詳しく要望や条件を話せば、どんな暮らしがしたいのか、具体的なイメージが伝わります。

次のステップでは、リフォームの方向性がわかるプランが提案されます。これをもとに話し合いを重ねてディテールを決め、見積もりをもらい、施工に移るのが基本の流れです。「こうしたプロセスでは、関係する

家族全員が話し合い、事前に意見をまとめておくことが望ましい」と、加部さんは注意を促します。家族の意見が統一されていないと、リフォームが滞るからです。

また、女性陣の参加は必須。家にいる時間が長く、家事の大半を担う女性の意見がなければ、居心地の良い住まいは実現しません。親世代など高齢の方も話し合いに参加してもらいましょう。高齢者は突然住まいが変わると、新しい生活に順応できずストレスがたまり、体調を崩すこともあるとか。「リフォームに積極的に参加すると、住まいの変化に対する心構えができ、その後の暮らしに適応しやすくなります。また、間取りは細かく仕切らないほうがいいですね。今後家族のさらなる高齢化が進み、再びリフォームすることになっても、大幅に変更しなくて済みますよ」。

## 家族の数だけ さまざまなアイデア

成功するリフォームのエッセンスを、加部さんが手がけた事例で見てください。P129で紹介したケース1の玄関、実はマンションです。このリフォームは「戸建て住宅にあってマンションにはない機能」に注目

して進められました。玄関に直結した家事納戸を設け、居室は琉球畳と障子で和のテイストを入れたワンルームに(P130右)。ダークな色調ですが、畳やベッドカバー、壁土が渋い緑色でほどよいアクセントになっています。置き家具や小物も、加部さんがコーディネートしました。

作業中孤独になりがちだった北側のキッチンも、リビングとひとつにして南側に配置したのがケース2(P131上)です。加部さんは、「対面キッチンには、定年を迎える夫婦にこそ必要」とアドバイスします。働く妻の姿を見て夫が手伝おうと思ったり、逆に配膳をお願いしたりと、夫婦のコミュニケーションのきっかけに役立ちます。ケース3は、病身の親と同居するための住まいです。手すりを各所に設けましたがインテリアにほどよくマッチして目立ちません(P131右下)。リフォーム前と水回りなどの配置を変えず動線を同じにしたことで、親も新しい住まいにすぐなじんでくれました。

「趣味のコーナーや家族のほどよい距離を確保したり、団らんを大切にしたり。家族の数だけ、リフォームのアイデアがあるものです」と加部さん。

リフォームで、自分らしい快適な暮らしを始めたんですね。